
黒色トワイライト

一之瀬六樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒色トワイライト

【Nコード】

N5887Y

【作者名】

一之瀬六樹

【あらすじ】

UMAという魔物の存在する近未来のお話。 たった10歳の少女である春日メイは、UMAと戦うための特殊な訓練を積み、三宅咲麻という執行官の青年と二人きりで暮らしていた。 平和だったメイの日常。 それはあるUMAによる猟奇殺人事件にかかわることをきっかけに、 もろく崩れ去る。

序章 プロッコー（前書き）

まえがき

この作品は、新人賞への投稿を目的として書かれています。

そのため、お話が完結する前に更新が長期間止まってしまったり、予告なく公開が停止される場合がございます。

どうか以上のことをご理解頂いたうえで、気長にお付き合いくださいますようお願いいたします。 一之瀬六樹

序章 プロッコー

春日メイには、数年前までは東京都アースタウン千代田の郊外に、綺麗な髪の色をした母親と一緒に住んでいたという確かな記憶がある。

母は貧乏だったが、常にどこで身につけたのかわからないような品格を備えていて、その身なりや仕草に伴う気品においてはメイの知る限り右に並ぶ者はない。その香りは正しい成人女性の見本として、春日メイという齡十歳の少女の中に今も確実に根付いている。父親の顔など見たことが無い。母がいなくなったのはメイが六歳の頃で、母が幼い自分にどんなことを話したかなんてことは正直なところはつきりと覚えていない。

だが若く気品あふれる母は、メイの父親について何かを語ることはおろか、その存在を匂わしたことから一度もなかった。したがって自分が顔も知らない男と母との間に生まれた娘であるという実感は、メイの意識の完全に外側にある。

でもその代わりに……。託児施設からの帰り道に、母はよく職場の話をしてくれていた気がする。

その中でもとりわけメイがよく覚えていたのは、母の後輩として新しく就任した、まるで物語のヒーローのような天才エージェントの話だった。

「エージェントって、なに？」

「みんなを守る、ヒーローのことよ」

母は確かにそう言った。

「ひろー？」

「ひろーじゃなくて、ヒーロー。悪いUMA<ユーマ>をやっつける、正義の味方」

メイがエージェントという職業を知ったのはその時が最初だった。母が自分の仕事について詳しく説明してくれたのは、それが初めてだったからだ。母はエージェントと作戦行動を共にする執行官という仕事をしていたので、執行官とペアを組むエージェントは、いつも母が教えてくれる物語の中心にいた。

「彼って、本当にすごい。まだ大学生の新米エージェントなのに、AランクのUMAをたった一人で倒しちゃったんだから」

母は耳にかかる綺麗な黒髪を手で整えて、いつもよりも饒舌に語る。

「おかげで今回の被害はまったくのゼロ。A級事件で始末書を書かずに済んだのは初めてね。つい先月に、高校生から候補生やってた例の天才君が、エージェント卒業試験に初回合格したって聞いたんだけど私も腹いっぱいだったんだけど……。あの子はそんなんじや、まだ満足できないのかな？」

「??」

「あ、ごめんなさい。これじゃメイには、何の事だかわからないね」
「うっん」

母親の顔から急に笑顔が失せたのを見て、幼きメイは反射的に首を振った。

「ヒーローのお話、ききたい。ママ、つづけて」

「そう？　じゃあ、今度はメイにもわかるように話すわね」

それから母は、そのヒーローについてもっと詳しく話してくれた。なんでも、そのヒーローはママの部下らしい。部下というのは年下の友達みたいなもので、ママとヒーローは一緒に悪いUMAをやっつけるのがお仕事なのだ。でもそのヒーローは結構わがままだから、あまりママの言うことを聞いてくれなくて、ママはいつも困っているのだそうだ。

「だからメイは、あんな子に育っちゃダメよ？」
「うん」

メイは素直に頷いた。

「あ、でも、ママ」

すぐに間違いに気づいて、メイは言い直す。

「わたし、おつきくなったらヒーローになりたい」

「」

母は途端に硬直したようだった。

「ヒーローになって、みんなを守るの」

「えっと、どうして？」

「だって、かっこいい！」

「うーん……」

「むずかしい？ メイにはだめ？」

「そうじゃなくって」

母はいつも笑顔だったが、この時だけはあまり、嬉しそうな顔を
していなかった気がする。

「メイは、他になりたいものはないの？ ほら、お花屋さんとか、
ケーキ屋さんとか」

「ううん。ヒーローになりたい」

「女の子はヒーローにはなれないのよ？」

「やだ！ ヒーローになる！」

子供は、一度こうと決めたら簡単には譲らないものだ。
とくにメイは昔から、変なところで頑固だった。

「仕様のない子」

母はそこで、ようやく笑った。

「そうねえ。じゃあ、メイがブロッコリー食べられるようになった
らいいよ」

「ほんと？」

「うん。ママは嘘つかない。だから今日の晩御飯は、ブロッコリー丼ね」

「ブロッコリーどん!？」

「前から一度作ってみたかったのよね。ぜんぶ食べられたらメイ、ヒーローよん？」

「う。じゃあがんばる」

「うん。がんばれ」

「……ひーろーになったら、ママも守ってあげるね？」

「そっか。期待してるわ」

結局、ブロッコリー丼は食べられなかった。

薄い醤油で味付けがされているとはいえ、大きなどんぶりの上に乗っかっている大量のブロッコリー。その姿はメイの好き嫌いを急激に加速させるのに充分なインパクトを誇っており、あれ以来メイはブロッコリーと聞くだけで小さな悲鳴が出るようになった。

でもあの時ちゃんと食べていられたならば、もしかすると母が自分の前からいなくなることにはなかったのではないかと、今でもちよっと思っことがある。

第一章 ひよこ模様のエージェント 1

月の無い夜の住宅街。耳鳴りがするほどに静かで、犬の遠吠えはおろか車の音も響かない。

薄暗闇の中、赤い外套を着た小柄な少女がアスファルトの上に立ちつくしていた。

「……」

裏道にて静かに立つ道路灯に照らされ、闇夜にすら光り輝くみどりの黒髪。

その艶の深さは、少女の幼さをよく表していた。夜の住宅街にたった一人でいるという状況にまるで似つかわしくない。だがそれに反して、少女の瞳は猛禽類くもうきんるいゝのように大きく見開かれ、体内で解放されたエーテルの輝きを受けて紫色に光っていた。

『ミッション スタート』

どこからか住宅街に木霊する、機械的な女声。

直後、少女の背後から背丈三メートルほどある大猿のUMAが現れる。それと同時に、UMAは少女の脳天を目掛け、全体重とありったけの攻性エーテルを乗せた一撃を放った。

しかし、その両手が住宅街のアスファルトを粉碎した瞬間。UMAの喉元を、銀の刃がぬらりと一直線に通り抜けていた。

一言のうめき声も発さず、そのまま前のめりに倒れるUMA。その背中には先程の赤い外套を着た少女が、首筋に小太刀を突き立てるようにして圧しかかっている。

やがて少女が小太刀を首から勢いよく抜き取ると、UMAの体は青白色に光る粒となって空気中に霧散していく。

体細胞の構造が、動植物とは異なる稀少生物　U M A。その細胞がすべてエーテルと呼ばれる特殊な霊的反物質から構成されていることが明らかになってからというもの、彼らの持つ能力の秘密が次第に明らかになってきた。

どこからか現れ、人を襲い、どこかへと消えてゆく異生物。人類が初めて彼らに生身で対抗できるようになったのは、わずか十数年前のことである。従来の刃物や火器が改良され、武器の形をした「ドローデバイス」を媒介して、人類の持つエーテルを身体の外側へ引き出すことができるようになった。

見る人が見れば少女の持つ小太刀の形をしたそれが、世界最先端の技術を駆使して造られたデバイスであることは明らかだろう。

そしてそれ以上に……純度の高いエーテル体で構成されているU M Aの身体を、一突きで貫ける少女。その体内に秘められたエーテルが人並み外れていることに、驚きを禁じ得ない。

『エクセレント』

響く機械的な女声。

『シミュレイション　ケース50　レディ　』

機械声に従って、少女の立ち位置はそのままに、徐々に周囲の情景が切り替わってゆく。

先程までとは打って変わって、今度は昼間のショッピングモールを行き交うエキストラ達のヴァーチャルリアリティも、かなり入念に作り込まれているようだ。

『ミッシヨン　スタート』

これで最後だ。

外套の少女、春日メイは小太刀を握る手に力を入れ、やがてどこから現れるはずのU M Aの気配を探る。

半年前の卒業試験ではさっきのU M Aに不意打ちでやられたので、今度は開始からエーテルを解放して隙を作らないように身構えていた。その作戦が功を奏したのか、今回は自分でも不思議なくらいに

あつさりと、鬼門だったケース49をクリアすることができたのである。

だが、ラストミッションであるこのケース50は初見だ。相対するUMAも、クリア条件も一切わからない。

ここでミスをすれば、また半年後の卒業試験までお預け。エージエント候補生として、訓練の日々に逆戻りになってしまう。

訓練ばかりの毎日も、べつに嫌いじゃない。けれど正式なエージエントにさえなれば、UMAの駆除を主な職務とする執行官の仕事を手伝えるようになる。

そうなれば、きつと三宅さんも。

「……」

激しい緊張、そして期待に、幼い顔がこわばる。

「……………」

ただし彼女の緊張の糸は、そう長くはもたないのが常だった。

±

「ねえ三宅さん！　UMA出てきませんよ！？」

高く、芯の細い儚げな声で、メイはショッピングモールの天井に向かって呼びかけた。

天井にはヴァーチャルリアリティの風景が投影されているばかりだが、この訓練場で何度も仮想訓練を続けてきたメイは、そこに光学迷彩処理のされたモニタリングカメラが設置されているのを知っている。

そしてモニターの向こう側にある観測室では、メイの保護者でもあり、危険UMA特別対策庁　通称アフスの執行官である三宅咲麻くみやけさくまゝが、彼女の様子をやきもきした様子で見守ってくれているはずなのだった。

「……」

スピーカーから漏れる雑音から、観測室でマイクのスイッチが入

れられたことがわかる。

しかしそこから三宅の返事はおるか、他の試験関係者各位の喋り声も聞こえない。おそらくまだ試験の最中なので、だんまりを決め込んでいるのだろう。

「あー！ これって、壊れてるんじゃないですかー!?」

紫の眼光を宿したまま、メイは吹き抜けになっているシヨッピングモールの天井に向けて、そういったことを叫び続けていた。

「三宅さ……」

その時、シヨッピングモールの巨大シャンデリアが青白く発光し始める。

そこに向けて、強力なエーテルが充填されていくのをメイは肌で感じた。

「……ん？」

そしてその直後、シヨッピングモールの照明が、すべて消える。

「て、停電？ わ、た、きゃあっ！」

突然の落雷。

激しい轟音とともに閃光が発せられ、メイの立っていた地点に大きな穴が開いた。

それから若干遅れて、シヨッピングモールの照明が元に戻る。

「うひゃ……」

寸前で落雷を回避したメイが穴の中を覗き込むと、モール全体を支える石の土台はおるか、その下の大地までが真っ黒焦げにえぐり取られ、底が見えなくなっていた。

『油断するな。メイ』

三宅の声だ。

いつも冷たい声色だが、これを聞くとメイはなぜか落ち着く。

「ゆ、油断って……。なんで建物の中なのに、雷が」

額に嫌な汗を流しながら、やや引きつった顔でつぶやく。

「ていうか、これ、当たったら普通に死ぬんじゃないあ……」

『物理ダメージは最少に設定してある。君の抵抗力なら、気を抜か

ない限り直撃を喰らっても死にはしない』

三宅はスピーカー越しに、なんでもないような声色で応えた。

「ということは、気を抜いてたら死ぬかもしれないんですね……」

『訓練で死ぬようなら、どうせ実際の任務は無理だ。嫌ならギブアップしろ』

「や、やります！ やらせてください！」

姿勢を正し、小太刀を構えるメイ。

「せっかくここまで来たんだから意地でもエージェントになって、絶対に三宅さんのお役に立って見せます！」

意気込みに応じて、瞳の中のエーテルも鈍い輝きの強さを増す。

『そうか』

三宅の声を残して、モールの電灯がまた一瞬消えた。

「……」

放出される雷のエーテルを察知して、メイは瞬時に建物の二階に跳躍した。

すると直前まで立っていた地点を二度目の落雷が襲い、大穴がふたつ並ぶ形になった。

「あぶない、あぶない」

ふうと息を吐く。敵の攻撃精度はやはり完璧のようだ。

しかし、二度の攻撃でその法則性もある程度わかってきた。

まず、落雷には充填時間が必要。次に、放電前には一瞬だけモールの電気が消える。さらには、必ず直前に自分のいた地点に向けて雷が落ちる。

「つまり……電気が消えたときにその場から動いてれば平気、ってことだよな」

第一章 ひよこ模様のエージェント 2

『目標の名前はダークホース。周囲の電力に自分のエーテルを干渉させ、強力な放電を促すことのできる動物型のUMAだ』

三宅の声が冷静に敵の情報を告げた。

『平原などの開けた場所ではさほど脅威にはならないが、都市部などの人口密集地では、周辺の放遊電力を誘導させて手がつけられない状態になる。民間人に被害が及ばないよう注意しつつ、迅速に駆除にあたれ』

「駆除って言っても、本体がどこにも」

雷を避けつつ、周囲を見回す。

突然の落雷にざわつく人、人、人。所詮は仮想現実の世界だが、妙に芸が細かい。

「ていうか、人が多すぎるよ……。今までの訓練では民間人なんていなかったのに」

これまでの訓練は、基本的に警視庁からの出動要請を受けてから駆除にあたる場合を想定したものだ。そのため戦闘現場では人払いがされていたのだが、今回のような人込みでは、メイの最大の長所である俊敏性が大きく削がれてしまう。

『実際の任務では、理想的な状況下でUMAを駆除できることなど稀だ』

三宅がメイをなだめすかすように言った。

『だから前回のケース49では、エージェントが夜道で突然背後からUMAに襲われる場合。今回のケース50では休日にショッピングモールへ買い物に来たエージェントが、偶然UMAの出現に居合わせるといふケースを想定している』

「え〜……」

どちらも交通事故に遭うより確率が低そうだ。

『そういう最悪の局面でもうまく切り抜けることのできる判断力、

それから身体能力をテストする趣旨だ。文句を言つな」

「ほとんどありえないのですか？ その設定」

あまりに不利な状況すぎて、どこか設定者のサディズムさえ感じられる。

『まあ、極端な局面を選びはしたが……だが実際にあったケースだからな。これに一人で対処できないようなら、エージェントになることなど俺が絶対に認めない』

「せ、せめてヒントをください！ ほ、ほら！ エージェントになったら個別無線だってあるじゃないですか？ 三宅さんの指示なしで動くことなんてほとんどないんですから、それくらいは」

言いかけて、メイは口をつぐむ。

「ごめんなさい。それも自分で考えなきゃ、ですよ」

あまり愚痴やワガママを言つて三宅を困らせるのは、メイの本意ではない。

それに三宅に本心から認めてもらえなければ、メイがエージェントになる意味も資格もない気がした。

『いや。思い出した』

だが観測室のマイクからは、意外な反応が返ってくる。

「な、何をですか？」

『この事件を実際に処理したエージェントがUMAの出現に居合わせたときには、現場にはパートナーである執行官も一緒にいた。その時のエージェントも今の君とおなじく遠距離攻撃への対処に困っていたんだが、パートナーである執行官のアドバイスをきっかけにして、その状況を打破したんだ』

「へえ、そうなんですか。……でも、どうして三宅さんがそれを？」
あとになって報告書で得た情報にしては、見てきたように具体的すぎる気がした。

「これは昔、俺が担当した事件だ。あの日は非番の買い物中だったが、突然ヤツが現れた」

「え」

メイの表情がこわばる。

メイの知る限りでは、三宅が自分以外の誰かと休日に買い物へ出かけたことなんて過去に一度もないはずだった。

『どうした？ メイ』

「あの　三宅さん。そのとき一緒にいた三宅さんのパートナーの人って　、その、もしかして女性の方……ですか？」

『……』

不意に返事が途切れる。

『なぜそんなことを気にする』

短い沈黙のあとにスピーカーから放たれた言葉には、会話を遮るような冷たさがあつた。

「あ、いえ……。なんでもありません」

『ヒントが欲しいんだっとな』

三宅は、いつも通りの淡々とした口調で解説を始めた。

『ヤツの姑息な攻撃方法からもわかるように、ダークホースは動物型のUMAにしては知能が高い。加えて、現場は人口密集地に位置するショッピングモール。ダークホースのような大きな動物型UMAが何の策も練らずに入ってきたのなら、その時点で大騒ぎになっているはずだ。しかし最初の落雷まで、そうなっていないかったということは　』

「えっと、UMAは人間の姿に擬態している」

エージェント候補生として講義で習った内容を、そのまま復唱するメイ。

『そういうことだ。現場には奴のエーテル残滓が充満しているから、エーテルの臭いで追跡することはできない。今のヒントを参考にし、民間人に紛れているUMAを探し出せ』

「了解です」

頷きながら返事をして、メイはすぐに二階の欄干くらんかんへ飛び乗る。

その上を走りながら、階下に見える民間人の顔を一人ずつ確認し

ていくことにしたのだ。

「よく見ると、結構いいかげんなんですね……」

民間人の中には、テレビで見た芸能人や現職総理大臣をはじめ、メイも会ったことのあるアフスの職員や？へのへのもへじ？な顔の人もいた。おそらくヴァーチャルプログラム制作でNPCを担当したスタッフの遊び心だろう。

「あ。あの人、三宅さんに似て きゃあ！」

落雷をギリギリまで避けなかったせいで、体勢を崩してしまうメイ。

『だから油断するなと……』

「し、してません！」

起き上がり、すぐさま状況を確認する。

さっきの一撃は電気が消える直前に、わずかに民間人の間でエーテルの光が発せられていた。ダークホースは放遊電力に干渉すると三宅が言っていたが、その干渉波に使われたのが先程の光だったのだろう。

「ということは」

ちょうどこの近くに、民間人に交じって目標のUMAがいる。

メイはシャンドリアの上に飛び乗り、再度意識を集中させて、民間人の顔を俯瞰くふかん>した。

第一章 ひよこ模様のエージェント 3

「……………いた!!」

一目でそいつがUMAだとわかるほどに、異様な面相である。

紺色のスーツを着た、サラリーマン風の 馬ヅラ。

より具体的に表現するならば、それは二足歩行する馬そのものだった。

「こ、これが最後のUMA……?? み、三宅さん!」

『……ダークホースは動物型のUMAで頭も良いが、擬態がものすごく下手だな』

「服着ただけじゃないですか!」

「だがあれで本人は上手く化けているつもりなのだ。性格はいたってデリケートだから、まあその、あまりそのことには触れてやるな」

「なんで周りの人は普通に受け入れてるんだらう……」

メイにジト目で見つめられた黒馬のUMAことダークホースは「バレたっ!!」と言わんばかりに目を見開いて、身体をプルプルと震わせている。

大量に汗をかくのは人間と馬だけと言われているが、それは冷や汗も同じらしい。彼の顔はタテガミまでぐっしり濡れていた。

「しかも、なんか斬るのが可哀相になってきたんですけど……」

『離れた場所から一撃で死ぬような攻撃をしてくるヤツだぞ。遠慮はいらん』

「は、はあ」

曖昧な返事をして、メイはシャンドリアから目標のUMAめがけて飛び降りる。

しかしその瞬間を狙っていたかのようにして、メイの目下でダークホースが口を大きく開き、歯をむき出しにした。

「!??」

メイがその異変に気づくと同時に、ダークホースの口の中から青白い電撃が放たれる。

「くっ……！」

避けきれないと悟ったメイは、全身のエーテルを外側に向けて放出した。するとメイの身体の外側に、大きな炎を纏うようにして紫色のエーテルが防御の膜を張る。

幸い、ダークホースが咄嗟に放ったその電撃は、モール内の電力を集めた落雷の威力にはほど遠かった。それはメイの身体を覆うエーテルを貫通するどころか、逆にその軌道を歪曲され、電撃はあさつての方向へ飛んでゆく。

「やあああああつ！」

落下中のメイが振り下ろす、紫色の攻性エーテルを纏った剣刃。落下スピードを上乗せされたそれはメイの小太刀を離れ、目標へ向けて音速のごとく突き進んでゆく。

剣刃は、血眼を見開くダークホースの体を斜め一直線に切り裂いた。

断末魔となる馬のいななき。

直後。ダークホースの全身は、青白い光の粒となって空気中に爆散した。

「ふう」

自らの放った技の反動で、少し離れた地点に着地するメイ。

『コングラチュレイションズ！ オンユア グラジエイション！』

「ありがとう」

メイが女声プログラムに返事をする、ショッピングモール内にファンファーレが鳴り響く。気がつくとき先ほどまで怯えうるたえていたはずの周囲の民間人も、今は皆、メイに向けてにこやかな拍手を送っている。

「あ、あはは……。恥ずかしいな」

恥ずかしまぎれに自分の頬を撫でるメイ。

ファンファールが鳴り止むと同時に、訓練場内のヴァーチャルリ
アリティが解かれ、周囲の景色は鋼色の広大な空間に戻っていく。
メイはその中心にある円盤型のエレベーターに乗り込むと、ゆっく
りと観測室へ昇っていった。

第一章 ひよこ模様のエージェント 4

2

「おーっし！ やったな嬢ちゃん、おめでとう！」

卒業試験を終えたメイに一番に駆け寄ってその肩を痛いほどに叩いたのは、訓練中に何度も世話になったアفس職員の有沢健次くありさわけんじ>。

着崩した制服がなければ繁華街を昼間からうろついている若者と見た目がそう変わらない、ボサボサの金髪頭をしたオペレーターだ。「有沢さん、ありがとう」

「よかったなあ！ これで嬢ちゃんもようやく正式なエージェントだ！」

「驚きましたよ。最後のアレ、なんなんですか？」

「ファンファールのことか？ ふふん、オレから嬢ちゃんへの特別プレゼントさ」

「それもびつくりしましたけど、あのUMAのことです。たしかに強かったですけど、妙に人間的だったっていうか、拍子抜けしたっていうか……」

「あー、アレな。アレは」

話し込む二人の横に、黒いカジュアルスーツの男が立ち止まった。長身で、髪は少し長めだが、あくまで清潔に見える範囲で整っている。顔の掘りは深く、今も無表情。本人に自覚はないものの、それは対面する相手に威圧するような印象を与えかねないものだった。

「あつ」

はしゃいでいた自分に思わず赤面し、うつむいてしまうメイ。

「あ、あの……、三宅さん。わたし」

「よくやったな、メイ」

「は、はい！」

メイははにかむような笑顔を向け、三宅の握手を求める右手に、両手で応えた。

「正直、こんなに早くクリアするとは思っていなかった」

「が、頑張りましたから……！」

「そうだな。君は頑張った」

そう言って、さびしげに微笑む三宅。

「俺にはまだ本部で書類関係の仕事が残っている。悪いがメイ、先にマンションへ帰っていてくれ」

「い、いえ。三宅さんのお仕事が終わるまで待ってます」

「そうか」

三宅は有沢に向き直る。

「おまえ、この後はオフだったな。少し相手をしてやってくれ」

「ああ。わかった」

「すまない。すぐに終わらせる」

そう言い残すと三宅は自動ドアを通り抜け、さっさと観測室を出て行ってしまった。

「なんだろう……。三宅さん、あんまり喜んでない気がする」

やや落ち込みながら、三宅の出て行ったドアを眺めているメイ。

「うーん、そりゃそうだろうなあ」

その様子を見て、有沢は困ったような表情で言った。

「なにが、そりやそうなんですか？」

「だってアイツ、嬢ちゃんがエージェントになることに、最後まで反対してたわけだし」

「え、うそ？」

「さっきの話の続きになるけどよ。このエージェント候補生卒業試験ってのは、一般の訓練生ならケース20で終了だったんだよ」

「え……」

大きく息を吸い込む。

「ええええええええええええ！？」

メイが驚くのも無理はない。

正式なエージェントの資格をもらって執行官である三宅とペアを組み、UMAを駆除する仕事を手伝う。そのためだけにメイはこの数年間、厳しい訓練と卒業試験での途中リタイアを繰り返してきたのだ。

「嬢ちゃんがケース20をクリアしたのが、たしか二年前……八歳のころだろ？ あんとき本当はもう免許をやってもよかったんだけど、三宅がすごい剣幕で反対してさあ」

「な、なんで……？」

「まだ年端もいかないうな子供にエージェントが勤まるわけがない！ とか、たとえ能力は優秀でも、精神的な未熟な子供を任務に就かせると大きな失敗に繋がる！ とか言ってたな」

「き、厳しい……。さすがは三宅さん」

「んな立派なもんじゃねえよ？ オレにはただ、大事なメイちゃんがUMAにやられてケガしたら嫌だから免許はあげない！ ってダダこねてるようにしか見えなかったもんよ」

「あ
」

ただ三宅の仕事を手伝うためだけに頑張ってきたメイには、三宅がそれをどう思っているかなんて考えたこともなかった。そして有沢の話が本当なら、理由はどうあれ三宅は、メイがエージェントになることなどこれっぽっちも望んでいなかったということになるのだ。

それはメイにとって、考えていたのとはまったく真逆の事実だった。

「本部の人間はみんなわかってんだから、そうならそうと正直に言やあいいのによ」

さらに深く落ち込むメイを尻目に、有沢は続ける。

「そうすりゃ嬢ちゃんが大人になるまで免許保留ってことですんだのに、面倒な理由つけやがるんだわアイツ。そのせいでこじれて、嬢ちゃん専用の特別プログラムをクリアしたら、そのときには卒業を認めようってことに落ちついたのよ。それがあのケース21からケース50の試験ってわけ」

「途中から急に敵が強くなった気がしたのは、気のせいじゃ……なかったんですね」

ふらふらと壁に手をつき、がっくりとうなだれるメイ。三宅の気持ちは空回りし、メイが不当に苦勞させられる原因になっただけだったわけだ。

第一章 ひよこ模様のエージェント 5

「あーそうそう。たしかそんなときの計算では、嬢ちゃんが成人するくらいの歳になれば、もしかしたらケース50をクリアできるかもしれないねえな　ってトコだったんだよねあ」

煙草を取り出し、頭に浮かんだ思い出話を流れるように語り続ける有沢。

「なのに嬢ちゃんがものすげえ速さで成長するもんだからさ、ヤツの悪たくみは結果として、嬢ちゃんの卒業をたったの二年間ほど伸ばしただけで終わっちまったってわけだ。きっとアイツとしてはそこが面白くねえんだろうなあ。……あ」

すっかり口を滑らせすぎた有沢がメイの顔を振り向くと、メイは涙を浮かべてぷるぷると震えていた。

「うつ……！　うぐ、ひつく……！」

嗚咽まじりに、あふれ出す涙を拭うメイ。

「わ、わだし、知らなくて……！」

「あーいやいや！　嬢ちゃんは悪くないんだぞお？」

あわてて有沢はポケットからイチゴ味のキャンディーを取り出し、必死になだめようとする。

「ほら、アメちゃんやるから！　な？」

「……ぐ、ひつく……！」

メイは泣きながら素直にそれを受け取ると、ビニル包装を破り、口の中で転がし始めた。

それを確認して有沢は、ほっと胸をなでおろす。

「そのお、なんだ。アイツも嬢ちゃんがエージェントになったこと、そんなに嫌がつてるわけじゃないと思うぜ？」

「ほんと……ですか？」

「ああ、ホントさ！」

大袈裟にジェスチャーし、有沢はまだ十歳のメイに向けて全力で

愛想を振りまいた。

「ここだけの話、最後のケース50のUMAな。あれは三宅が自分でプログラミングしたものを、本番直前で挿し替えたものなんだ。メイがエージェントとしてやっていくなら、最初に乗り越えてほしい相手だ、とかなんとか言ってたな」

思い出しながら、うんうんと一人でうなずく。

「きつとアイツ、もう嬢ちゃんを止める気なんてなかったんだと思うわ。だって本当に止める気なら、そこで絶対に勝てないような極悪なUMAをプログラミングしてくるはずさ。あいつの性格ならな」
「……」

「まあ、オレに言えるのはこのくらいだな。あとは家に帰って、アイツに直接確かめな」

有沢はニカリと白い歯を見せて、顔に涙あと残るメイの背中をぽんと叩いた。

第一章 ひよこ模様のエージェント 6

3

アフスの更衣室で白と黒を基調にしたゴシック調のワンピースに着替えたメイは、手持無沙汰な様子でエントランスロビーに立っていた。

仕事を終わらせた三宅が部署内で待機していた彼女をそこへ呼び出したのは、結局試験終了から三時間ほど経ってからのことだった。もう夜も遅い。アフス本部ビル内で営業している売店も、ちょうどメイの見ている前で閉店の準備を始めているところである。

「すまない、メイ。遅くなった」

「いいんです。三宅さんが忙しいの、わかってますから」

さすがに遅くなりすぎたので有沢には先に帰ってもらったが、メイは三宅のいないマンションヘ一人で帰ってもやることがない。メイにとっては三宅のいる場所が自分のいるべき場所である。記憶のはつきりしている六歳の頃からというもの、メイはずっとそうやって育ってきたのだ。

「あの、三宅さん」

待っている間にも、何度も有沢の話を思い出しては一人で凹んでいたメイ。

「あの……」

今も三宅を正面から見れないで、申し訳なさそうにうつむいた。訝しむ三宅。メイはその様子を感じてようやく顔を上げ、まず卒業してしまったことを謝ろうとする。

ところがそこで、メイの瞳に三宅が右手持っている小さな箱が映った。

「あれ？ その箱……なんですか？」

赤とピンクのストライプの包装紙にくるまれ、黄色いリボンまでつけられた小さな箱。その可愛らしさは、寡黙男子である三宅が持つには、まるで似合っていないかった。

「気になるか？」

「あ、い、いえ。別に……」

三宅はそのままなんでもないような顔をして、メイにそれを手渡す。

「はい？」

受け取るが、驚きのあまり、妙な声が漏れてしまうメイ。

「開けてみてくれ」

「で、でも……」

「いいから」

三宅に促され、メイはその場でリボンをほどき、箱を開けた。中に入っていたのは、可愛らしいピエログマの腕時計。

メイが以前セレクトショップで物欲しそうに眺めていたのと、まったく同じものだった。

「卒業祝いだ」

「え？」

「いや、その。まだ言っていなかったのをあとで思い出したんだが」
三宅は一瞬だけ気恥ずかしそうに目を閉じたあと、微笑を浮かべた。

「卒業おめでとう。今日から君は、立派な一人のエンジニアだ」

「み、みやげさん……！」

手渡された箱をおもいきり掴んだまま、三宅の胴体に抱きつくメイ。

「こ、こらメイ！ こんなところで……！」

三宅はあわてて周囲を見回す。

顔見知りでもある受付嬢二人が、こちらを見ながらクスクス笑っていた。

「みやげさん、みやげさん……っ！」

恥ずかしいことこの上ないが、涙して幼い子供のようにすがりつくメイを無理やり引きはがす気にもなれない。

「ごめんなさい、わたし、わたし……！」

スーツに顔を押しつける、涙まじりのメイの声。

「な、何を言っているんだ。謝る必要などないだろう」

「三宅さんが、わたしのために……っ、知らなくて、卒業しちゃって……！」

「！」

それだけで三宅は事情を察した。

有沢め。と、ただでさえ鋭い目を釣り上げらせる。

「気にするな」

三宅は自分の身体に押し付けられた頭の上へ、その大きな手のひらを優しく置いた。

「いつかは君がエージェントになるなんてことは、最初からわかっていた。それが遅かったか、早かったかという違いだけだ」

「……………」

顔を上げ、涙目で三宅を見つめるメイ。

「子供の君を任務に就かせなければならぬのは、たしかに心苦しい。しかしそれ以上に、俺は君の成長を心から嬉しく思っているよ」
背中を曲げ、三宅はメイの背の高さに合わせる。

「俺は口下手だからな。ちゃんと伝わらなかったというのなら、もう一度言おう」

それから、小さく咳ばらいをして、三宅はその言葉を告げた。

「卒業おめでとう、メイ」

「……はい」

メイが涙を拭いて、ようやく笑顔を見せる。

「ありがとう、ごさいます」

すると三宅も、小さく笑った。

第一章 ひよこ模様のエージェント 7

4

黒塗りのセダンから降りると、二人は都内にあるタワーマンションのエレベーターを昇り、高層部にある一室の扉を開けた。

「ただいまー」

色鮮やかなピエログマの腕時計をしたメイが、嬉々として先に中へと入ってゆく。

「おかえり」

あとから入った三宅が、玄関の照明をつけてメイを迎える。すると今度はメイがくるつと振り向いて、玄関から中へ入ろうとする三宅の前に笑顔で立ちふさがった。

「……ただいま」

「おかえりなさい。三宅さん」

メイが三宅と一緒にマンションへ帰って来たときは、こうした挨拶を交わし合うことがいつしか定着するようになっていた。

それがいつからだったかなんてことは、三宅ももう覚えてはいない。

ただ少なくとも、四年前　メイがまだ、ここへ来たばかりの頃。メイに一人で留守番をさせてることの多かった三宅は、幼い少女の待つ真つ暗な部屋に帰るたびに、心苦しく感じていた。

三宅はそれを、ぼんやりと思い出していた。

「あれ？」

リビングにやってきたメイ。

ソファの前に鎮座する低いガラステーブルの上に、見慣れない箱がいくつも置かれているのに気づいた。

「三宅さん、コレ……？」

「ああ。それはな、なんとプレゼント第二弾だ」

「え!？」

メイの目が輝き始める。

「今朝、家を出る前に用意しておいた」

包装こそされていないが、買ったばかりの新品であることは見て取れる。

至れり尽くせりの展開にメイは大歓喜である。

「三宅さんっ！ これも、開けていいですか？」

「ああ、いいぞ」

「なんだろう……？」

わくわくを抑えながら、ゆっくりと箱に手を伸ばすメイ。

もちろんこの箱はピエログマの箱や包装紙と同様、あとでクロゼットに入れて大切に保管しておくつもりである。

「この大きさ……お洋服かな？」

胸を躍らせ、メイは白い紙箱のふたを開けた。

「わあ!」

箱の中に入っていたのはホワイトベージュのブレザーだった。

「これ、制服ですね!？」

「ああ。前から注文していたものがやっと届いたところだ」

「え？ 前から注文って……。そういえば、わたしの卒業祝いの制服なんですよね？」

卒業試験が今日なのに、前から注文してあって、しかもリビングに用意されていたのはどういうことだろう？

「君なら、今回の試験で必ず卒業すると思っていたさ」

メイの言いたいことが伝わったのか、三宅は前々から準備していたことを明かした。

「他の箱には、ブラウスやネクタイなんかも入っている。すべて君のものだ。メイ」

「そ、そうだったんですか……！ 三宅さん、ありがとうございますっ！」

満面の笑みでブレザーを取り出し、袖を広げるメイ。

「へえ、エージェントにも制服ってあるんですねー！」

「……………」

三宅はあえて口を挟まずに、リビングの奥のクローゼットを開けて、自分のスーツとネクタイを丁寧に収納し始める。

「あれ？ でもこれって、近所の小学生が着ている制服とものすごく似ていますね」

そこで、ようやくメイがその事実に気づいた。

「ものすごく似ているんじゃないかって、近所の小学生が着ているのとまったく同じものだよ」

三宅は落着いてクローゼットを閉めつつ、なんでもないような言い方でそれを告げた。

第一章 ひよこ模様のエージェント 8

「しょ、小学生!？」

途端に笑顔が驚きに変わった。

「ひ、ひどいですよ三宅さん! い、いくらわたしの背だけが足りないからって、仮にも政府所属のエージェントなのに、小学生と同じものを着るだなんて でも嬉しい!」

感情が入り混じってしまい、怒るべきなのか喜ぶべきなのかわからない。

メイが一人で暴走しているのを見て、やれやれ、と三宅は人知れず頭を振った。

「エージェントに決まった制服はない。いつも着ている赤い外套で充分だろう。この制服はエージェントとしてではなく、民間人として君が来週から小学校に通うためのものだ。ほら、ここに校章が入っている」

「あ、ほんとうだ」

メイが勝手な思い込みでアフスのマークだと思っていた胸のワッペンには、『翠小』という白い文字が、くつきりと縫い付けられていた。

「あの、嬉しいのは嬉しいんですけど、ちょっと状況がのみこめないうような……」

目を細めて、小さな頭の中をぐるぐる回す。

「え? 小学校に通うんですか!? わたしが!？」

「任務もいいが、普通の子供としての日常も大事だ」

キッチンに立ち、夕食を作る準備を始めようとする三宅。

「候補生としての訓練も終わったのだから、以降は基本的にエージェントとしての出勤命令を待つことになる。空いた時間を無駄にするよりは、少しでも普通の生活に馴れておくべきだ」

「そ、そんな! わたしは小学校なんて、べつに……」

「いやなのか？」

「イ、イヤなわけじゃ、ないですけど……。で、でも！」

メイは小学校には通わず、基礎的な教育はすべてアフスの訓練を通して受けてきた。

だが今日でその訓練も終わり。被保護者ではなくパートナーとして、ようやく自分を育ててくれている三宅への恩返しができると思っていたのである。

ところが、そこへご褒美として与えられたのは初等教育への逆戻り。

もちろんメイにとっては一般の小学校など未知の世界で、今よりも幼い頃には懂れてさえいたこともある。しかしそれとこれとは話が別で、どこまでも子供扱いされていることに対して不満を隠せないのだった。

「そうか。なら、言い方を変えよう」

それを察している三宅は冷蔵庫からキャベツを取り出して手早く洗い、それをまな板の上に置く。

「メイ。これは任務だ」

振り向き、穏やかな微笑をメイに向けた。

「待機中は民間人として生活し、許される限り自由に行動すること。普通の少女として小学校に通い、そして」

三宅にしてはめずらしく、おどけるようにして手を広げる。

「君の、君だけの幸せを、早く見つけてしまうこと」

「わたしだけの、しあわせ……？」

「そうだ。これまでの君の人生はすべてアフスの中にあつた。だが君には、アフスからもエージェントからも離れたところで自分の人生を生きる権利がある。それを見つけることが俺の願いでもあり、君に課せられた任務だ」

「む、むう……！」

メイは頬を膨らませた。

「ずるい！ 任務だとか俺の願いだとか言つて、結局はわたしのた

めじゃないですか！」

「なんだ。わかってしまったか」

「もう子供じゃないんだから、わかりますよ！」

「ブロッコリーは食べられないのにな」

「ブ、ブロッコリーはっ！」

途端に表情が暗くなるメイ。

「……食べ物じゃありません」

「そうか」

その様子はどう見ても子供に見えるが。

……という言葉を、三宅は自分の胸のただけで留める。

「ともかくですね……わ、わたしだって、三宅さんの役に立ちたいんです！」

「もちろん、そっちの方も期待しているよ」

聞きなれたメイの言葉に、ふっ、と鼻を鳴らす三宅。

「なんだって君は、アプス設立以来の最年少エージェントなのだからな。しかも仮想現実の中とはいえ、候補生の段階でAランクのUMAを軽く退治してしまった優等生だ。そんなエージェントなど他のどこにもいやしない。パートナーの執行官としては、この上ない自慢話の種になるな」

「で、でもそれは、三宅さんがへんに試験を難しくしたからじゃ」

言いかけて、メイはそれまで知らないでいた事実が気がつく。

「Aランク!？」

「そう。ケース49のビッグフットとケース50のダークホースは、どちらも危険度AランクのUMAだ。並のエージェントならば本来一人で駆除できるような相手じゃない」

「そ、そうだったんですか!？」

自分でも知らないうちに、メイはエリートエージェントの仲間入りをしていたようである。

「とにかく、パートナーができたことでようやく俺も現場に戻れる。苦情処理や訓練の書類ばかり作っているのはもう飽きたからな。期

待しているぞ、メイ」

「ま、まかせてくださいっ！」

「だがとりあえず、来週から君の職場は近所の小学校だ。朝は早いが遅刻するなよ」

「……………」

何か言いたそうに沈黙するメイを尻目に、三宅はキャベツを刻み始める。

メイを育てると決める前はこの大きなマンションも立派なキッチンも、三宅にとっては無用の長物以外の何ものでもなかった。

しかし今はメイの存在が、この部屋の空気を実際よりも何倍も明るくしている。

険しくなりがちな三宅の顔は、知らずとわずかにほころんでいたのだった。

第二章 友達を作ろう！ 1

1

小さい……。ここで何百人も一緒に勉強するとは思えない。それが小学校の校舎に対して抱いた、メイの素直な感想だった。

「はい転校生を紹介しまーす」

黒塗りのメルセデスで三宅に学校まで送られてからというもの、ただ言われるがままにあちこちに挨拶していったメイ。まだ心の準備のできないまま担任教師に連れられて、教室の前で立ち止まる段階まで進んでしまっていた。

騒がしくて気圧されてしまいそうな教室の雰囲気だったが、女教師の発した先のひとことで5年3組の喧騒はピタリと止む。

（ぎゃ、逆に入りづらい……）

ホワイトブレザーの裾をつかみ、緊張を押し殺そうとするものの、次から次へと緊張の虫はわいてきてしまう。

「じゃ、転校生さんどうぞー」

「し、しつれいしますー！」

嬉しさと戸惑いの入り混じるメイは、ぎこちない素振りで教壇の前まで歩み進めた。

教室がなにやらざわめき始めるが、緊張しすぎているメイには何も聞こえてこない。

「ほら、黒板に名前書いて。大きな字でね」

「は、はい。先生」

初めて握るチョーク。噂には聞いていたが、とても書きづらかった。

「んっ、いい子ね」

メイの返事が気に入ったのか、一人だけニヤニヤしている女教師。その間に、メイは黒板にお手本のように整った字で、『春日 メ

イ』と書きつづった。

「か……さすが、めいです。皆さん、宜しくお願いします」
ぺこりとお辞儀をするメイを、クラスメートはきよとした顔で見ている。

整った顔立ちに、白い肌。皺ひとつない新品の制服。

そして、長く艶やかな黒髪の揺れる、丁寧なお辞儀。おまけに字も綺麗とあっては、緊張してしまうのはクラスメート達の方だったのである。

（あ、あれ？）

向けられた、沈黙の眼差しに戸惑うメイ。

「春日さんはねー、最近までご家族の都合で海外にいたのよー？
日本の学校のこととか色々わからないと思うから、みんな教えてあげてねー」

数人の女子が「……はい」と嫌そうに答えたが、ほとんどの児童は黙ったままだ。

「じゃあ、何か質問ある人いるー？」

「お、おれ知ってるぜ！」

突然一人の男子児童が立ち上がり、メイを指差した。

「おまえ今日、べ、ベンツに乗って学校まで来ただろ！」

教室内の空気が、一瞬で凍りついた。

「ほ、ほんとうなの……？ 春日さん？」

どこか掴みどころのなかった女教師までもが、今はペットショップの売れ残りケースに入ったチワワのような瞳でメイを見つめている。

「ええ。本当ですけど……」

「そ、そう……。ちちち、ちなみに、その、おいくらくらい……？」
「なにがですか？」

「も、もちろん、そのベンツの値段よ……」

「えっと、たしか二千万くらいだろうって、前に三宅さんが」
「にせつ」

「そんなに高くないですよね？」

メイには、金銭感覚というものが全く備わっていなかった。

この一件以来、5年3組の春日メイには、お嬢様キャラが定着してしまっただった。

2

「学校って、難しいです……」

マンションのリビングで、三宅と一緒に食卓を囲むメイが、ぼつりとそうつぶやいた。

「どうした？ 授業についていけないのか？」

まさかとは思いつつ、一応そう聞いてみる三宅。

「はい……。算数の時間で、方程式は使っちゃいけないって怒られました」

「そうか」

メイが学校でどんな毎日を送っているのか、それだけで三宅にはなんとなく予想がついてしまった。

おそらく算数の授業でのことなんて、ほんの一例にすぎないのだろつ。

幼少期からアفسで大人に交じって成長してきたメイには、いまさら小学生と同じ価値観など持てないのだ。きっとクラスでも浮いているに違いない。

「友達も、いまだにできなくなつて」

まさしく三宅の予想していた通りだった。

「努力はしたのか？」

「しました。でもみんな、どこかよそよそしいんです……なぜでしょう？」

「さあ。なぜだろうな」

それが本人にわかれば、皆よそよそしくなどならないだろう。

「三宅さんは学生時代、友達いました？」

「……いきなりデリケートな質問をするんだな」

「す、すみません」

「いたと言えはいたし、いなかったと言えはいなかった。学生時代には、男の友人が一人いただけだったんだ」

「えと、女の人は……？」

「聞きたいか」

「は」

「俺は話したくない。女性関係では酷い目にあつた」
聞かない方がよさそうだ、とメイは察した。

「くっ……！ 友人だと思っていたのに……っ！」

「……」

何があつたのかについては非常に気になるところだが、メイはあえて話題を変えることにする。

第二章 友達を作ろう！ 2

「そ、その男のお友達の方と三宅さんは、どうやって仲良くなったんです？」

「話してもいいが、大学での友人作りは小学生のそれとは大きく違うぞ」

「え、そうなんですか？ でも、なにかの参考にできればと思って「ヤツから近付いてきたんだ。？仲良くなっておけば、あとあと利用できそうだから？」とか言っていたな。正直なヤツだった」

「そ、それって友達とはいえないんじゃないか……」

「そう思うか。そうなると俺は、学生時代一人も友人がいなかったということになるのだが……」

「友達ですよ！ 出会いの理由はなんであれ、きっと二人は友達です！」

「……………」

小学生にまで気を遣われて、逆に情けなくなる三宅。

「まあ、俺の話はともかく……。小学生の友人を作りたいのなら、まずは人気者になることだな」

言いながら、夕食のブラックシチューを口に運ぶ。

「人気者って、友達がいっぱいいる人のことを言うんじゃないんですか？」

「少し違うな。人気者とは多くの人間からの評価が高く、かつ比較的好かれている者のことだ。だが、そういった人間に友人が多いとは限らない。ちやほやされているからといって、必ずしも相手から友達だと思ってもらえているわけではないからな」

まるで自分のことのように断言する三宅。

メイはスプーンを動かす手を止めて、三宅との会話に集中していた。

「えっと、それなのに、わたしが人気者になれば友達ができると？」

「簡単な話だ。話を聞いた限りでは君の場合、そのわずかな好感すら相手に持たれていないようだからな。それどころか、むしろ嫌われていると見てまず間違いないだろう」

「えーっ！ な、なんですかー……！？」

その反応を見て、まるで昔の自分を見ているようだ、と三宅は思った。

「俺にもわからない。だが友人の話では、他人はささいな言動でも鼻につくことがままあるようだ。……自分では、いたって普通にしているつもりなのだが」

「友達作るのが、難しいんですね……」

「だからメイ。君は学校で他人より優れているところを見せつけて、周囲の人気を勝ち取ることから始めるんだ」

「ええっ！ そ、そんな！」

驚き、困惑するメイ。

「わ、わたしには他の人よりすぐれているとこなんて、どこにもないですよっ！」

「む……。そういえば、授業について行けていないのだったな」

実際は授業の方がメイのレベルに合っていないだけなのだが、それを理解できないクラスメートの信頼を勝ち取れない以上、同じことだと三宅は判断した。

「だったら、今度は体育の授業を狙うといい。次の体育はいつだ？」

「あ、明日です。五十メートル走のタイムを計るらしくて」

「短距離か……。よし、少しだけなら本気を出すことを俺が許可しよう」

「……？」

メイはきょとんとした顔で、三宅に問い返す。

「それって、エーテルを使ってもいいってことですか？」

「いいか？ 少しだけだぞ。やりすぎて地区記録を更新するようなマネはするなよ」

「でもそれって、ズルのような……」

「ズルなものか。あくまで自分の持つ本来の力を出すだけだ。少しだけな」

「うーん……。でも……」

「気が進まないのなら無理強いはいしない。もともと君の問題だ。自分で考えろ」

冷たくそう言い放つと、椅子から立ち上がる三宅。

「それはそうと、さっきから箸が進んでいないな。今日のは不味かったか？」

「い、いえ！ いただきます」

少し冷めてしまったシチューを、急いで口に入れ始めるメイ。

三宅はそれを確認すると、自分の食器を重ねて、洗い台に運んで行った。

レバーを上げて、蛇口からぬるい水を出す。

「……友達ができません、か」

目を閉じて、三宅は静かな笑みを浮かべる。

「ようやく人並みの悩みを持つようになったな」

「え？ 三宅さん、なにか言いました？」

「いや。ひとり言だ」

メイを学校へやったのは間違いではなかった、と三宅は思った。

第二章 友達を作ろう！ 3

3

メイは、まだ悩んでいた。

（どうしよう……。本気、出しちゃおうかなあ……）

都内にあるにもかかわらず、豊かに広げられた小学校のグラウンド。

体操着に着替えたメイは、他の児童と同じように足を折り曲げて地面に座り、自分の走る順番を待っている。

ほかの児童はみな、メイから見ると手を抜いているとしか思えないようなスピードで、息を切らしながら走っていた。こんな中でメイが本気を出せば、三宅の言う通り一気にスターになれるだろう。

（でもなあ……）

「次は誰かな？ 出席番号7番と8番の人、はやく準備してね」

物腰の弱い男性の体育教師が、座っている児童達に向かって呼びかける。

しかし、誰もスタートラインに向かう気配はない。

「出席番号7番の……春日メイさんと、8番の木之下美羽さん」

「あ、あたしなのか」

そのとき、ちょうどメイの近くに座っていた女子児童が立ち上がった。

細いリボンでふわふわの髪の毛を後ろにくくった、同性のメイから見ても可愛らしい女の子である。

「美羽ちゃん、ガンバ」

「コケるなよ」

立ちあがっただけで、他の女子から声援が飛んだ。

「うん。適当に頑張るね」

木之下美羽はその声援に笑顔で手を振って応え、スタート位置へ

と向かう。

（いいなあ……）

メイはその様子を、座ったままの状態でうらめしそうに眺めていた。

「7番の春日さん。いないのー？」

そこでまた体育教師に大声で呼ばれ、ようやくメイは自分の順番でもあることに気がついた。

「あ、は、はいっ！」

あわてて立ち上がり、美羽の横に並ぶ。

声援ではなく、クスクスという嘲笑の聲が送られた。

±

「位置について、よいい」

体育教師は赤い旗を上げ、ゴール地点にいる計測係の男子児童へ視線を送る。

メイが小さく腰を落とし、スタートに備えたところで、

「気にすることないよ」

そんな小さなささやき声が、左耳のすぐ横から聞こえてきた。

「えっ？」

「スタート！」

教師の旗が下ろされ、隣の美羽は一足先に走り始める。

「あっ……！」

出遅れた。とりあえず、己の筋力のみで走るメイ。

（は、早い！）

しかし前を走る美羽に、どんどん距離を離されてしまう。

友達の多い美羽に、体育の競争でも大差で負ける。

それが何を意味するのかは、メイにも一瞬で理解できた。

「ま、負けるもんか……！」

無意識のうちにエーテルが解放され、メイの瞳が紫色に輝き始め

る。

これがメイの特殊な才能だ。普通の人間とは違って、小太刀のようなデバイスを仲介しなくても体内のエーテルを引き出すことができる。たまにこうやって無意識に発揮されてしまうのが困りものだが、反射的に超人的な運動能力を生みだせるのは、UMAとの戦闘をこなすエージェントとして大きな武器だった。

エーテルの解放により次第に加速が増し、残像が幾重にも見えるほどの速さで前に進むメイの体。

美羽との間に開いた距離はあっという間に縮まり、ゴール手前で二人は肩を並べることになった。

「……！？」

横を走る美羽と、他の児童たちから驚愕の目が向けられる。

しかしメイはそれにも気づかず加速を続け、美羽よりも先に五十メートルを走り抜けてしまった。

「っと」

急いで力を抑え、ブレーキをかける。

振り返って計測系の男子児童を見ると、彼もまた呆けたような顔で、メイの顔をまじまじと見つめていた。

（や、やりすぎちゃったかも……）

ついさっきまでメイの前を走っていたはずの美羽が、かなり遅れてゴールする。

「はあっ……、はあっ……」

ゴール地点で立ち止まった彼女は膝に両手を当て、息を整えていた。

汗一滴流していないメイは、おそろおそろ目配せをしつつ、美羽の反応を見守る。

「か、春日さん！」

「は、はいいっ！」

その剣幕に、思わず後ずさり。

「あなた、速いねっ！」

美羽は額の汗を拭いながら笑顔でメイに近づくと、両手でその手をとって、軽く握りしめる。

「お、怒ってないの……？」

おどおどしながら尋ねるメイ。

「なんで怒らなきゃいけないの？」

逆に質問で返された。

「あたし、最初から思ってたの。あなたは他の人とはどこか違うなあつて。でもさっきので確信に変わったわ！」

「そ、そうかな……？」

「ねえ。もしよかったら、あたし達、お友達にならない？」

「……っ!？」

嘘みたいな展開に、メイは言葉を失った。

第二章 友達を作ろう！ 4

‡

しかし、そのやりとりには興味を示さずに、ただ二つのストップウォッチを握りしめている一人の男子児童がいた。

彼の名前は栗崎裕一<くりさきゆういち>。メイが転校してきたあの日に、教室で立ち上がった彼女を指差したあの少年である。

メイのタイムは、6秒75。

それは運動だけが取り柄だった彼の記録より、ずっと早いものだった。

「ちっ……！」

裕一は、メイのタイムを計測したストップウォッチを、思いきり地面に叩きつける。

メイと美羽がその音に驚いて、裕一を振り返った。

「お勉強もできるくせに、走ってもコレかよ。どこまでイヤミな奴なんだおまえ」

裕一はメイに向かって、いかにも不機嫌そうに悪態をつく。

「なによ。ひがんでるの？」

美羽が笑いながら間に入ったが、裕一の憎まれ口は終わらない。

「いいよな、金持ちは！」

「はあ？」

「どうせオヤジもオフクロも、どっかの大企業の社長か何かなんだろう？ 生まれたときから恵まれてっから、そんなに何でもできるよになるんだ。要するによ、おれ達とは違うんだよなあ！ 人種ってやつがよっ！」

「っ……！」

ショックを受けるメイ。

「ば、ばっかじゃないのアンタ!？」

その横から、美羽が裕一に対し非難の声を贈った。

「だってそうとしか思えねーじゃん！……春日、正直に言ってみろよ。大金積んで秘密の特訓でもしてたんだろ？どこまでも卑怯なぶっ！！」

そこで裕一の口をふさいだのは、美羽の放った強烈なビンタである。

「いいかげんにしなさいよ！」

鋭い目で裕一をにらんで、美羽は大声で怒鳴りつける。

「親がどうか、人種がどうか、そんな関係ないじゃない！」
それから彼の胸ぐらをつかみ、力強く引き寄せた。

「たとえアンタの言うように、この子が生まれつき人より恵まれていたとしてもねっ、そのぶんだけ苦勞もしてんのよ！こんな子が普通に生きるのがどんなに難しいのか、アンタは知ろうとしたことすらないんでしょう！どうせないんでしょうねっ！！」

「な、何言ってるんだよ、おまえ」

「ふんっ！さっきのでわかったわ！」

裕一の言葉をすべて遮る勢いで、美羽はまくしたてる。

「なんか他の子の反応がおかしいとは思ってたけど、この子ハブにしてイジメてるのってアンタでしょ！？男のくせに……！やることがみみっちいのよ！」

「なっ！」

「え？わたしイジメられてたんですか？」

まったく気がついていなかったメイは、一人だけきょとんと目を丸くしていた。

「ち、違いえよバカ！」

「なにが違うのよ！」

「い、いや、その……」

口ごもる裕一。彼自身、美羽にそう勘違いされる心当たりが無いわけでもない。

しかし、このまま春日メイイジメの主犯扱いにされるのは御免で

ある。

「な、なんかこいつ、絡みづらいんだよ！」

だからメイ本人も見ている前ではあるが、裕一は意を決してその内心をぶちまけることにした。

第二章 友達を作ろう！ 5

「授業では大人みたいに難しい言葉ばっか使いやがるし、給食とか昼休憩の時間も、一人で全然平気そうでさっ！ 金持ちで、美人で、なんか近付いちゃいけません的なオーラが出てんだよ！ オーラが！ みんなそう思ってたんだ！」

「……………」

胸ぐらからパツと離される、美羽の握りこぶし。

「ほー。てことは、アンタも美人だと思うんだ」

先程までの怒りはよそに、美羽は裕一に対して興味深そうな表情を向け始めていた。

「び、美人なんて言ってたかおれ？」

「言った」

「し、しまった……！」

顔を隠して上ずった声でつぶやくが、美羽にもメイにも丸聞こえである。

「仲良くしたいなら仲良くしたいと、はっきり言えばいいのに……………」
「ねえ？」と美羽はメイに向けて、裕一を嘲笑するような笑みを浮かべる。

「だ、だれがこんなイヤミ女と！」

「顔が真っ赤よ」

「今日は暑いんだよ！」

「春日さんはアンタみたいななのでも仲良くしたい思ってるのに。でしょ？」

「は、はい」

突然話を向けられたメイは、戸惑いながらも即答する。

「できればそうしてもらいたいなって、ずっと……………」
「くっ！」

メイに哀しそうな視線を向けられ、動揺する裕一。

「ていうかさ、興味があるからさつきあんなに怒ってたんじゃないの？　どうでもいいなら普通距離をとるわ。自分で気づいてないかもしれないけど、アンタこの子のこと」

「う、うるせえ！　それ以上言うなっ！」

その反応は、ほとんど自白しているようなものだった。

「……あ、ああそう」

必死な裕一にさすがの美羽も悪いと思ったのか、そこで話を元に戻す。

「まあともかく、そういうことならさつきと謝んなさい？　このままだと絶対に春日さん、アンタにものすごく嫌われてると思い込んだままになると思うから」

「ぐ」

奥歯を噛みしめる。

「たしかにすげえ二ブそうだからな……こいつ」

「？」

話が見えてこないメイは、頭の上に大きな疑問符を浮かべつつ、笑顔でその場に立ち尽くしていた。

「……わ、悪かった」

「聞こえないわ」

「あークソッ！　わかったよ！」

仏頂面でメイの目の前まで歩み寄り、頭を深々と下げる裕一。

「さつきは言いすぎた！　ごめん！」

「え？　あ、はい」

別に怒ってないのにな、ズルしたのは本当だし。

……などと内心で思いながらも、そこは素直に謝罪に応じるメイ。

「あ、あの、たしか、栗崎くん……ですよね？」

「ああ。栗崎だよ。栗崎裕一」

「え、えっと、もしよかったら、わたしとお友達になってくれませんか？」

「な、なにいい！？」

メイの提案に、裕一は面食らったような顔をする。

「わたし、同年代の子とこんなにお話したのって、木之下さんと栗崎くんがはじめてなんです。木之下さんとは友達になれたから、今度は栗崎くんと、って思ってる」

「な、なんだよそれ……？ おれらはお話しじゃなくてケンカしてたんだぞ！？」

「いいじゃん。せっかく春日さんの方から誘ってくれてるのよ？ これ以上ないチャンスってもんよ」

「だからそんなんじゃないっのーの！」

「栗崎くん」

不安そうな視線を裕一に向けるメイ。

「ダメ……ですか？」

やっぱり断られるのではないか、などと心配しているのだ。

「ぐ」

裕一は耐えきれずに目を逸らす。

この男は尻に敷かれるタイプだな、と美羽はこっそり彼の将来を案じた。

「いいか、春日……！ これはケジメだ！」

「は、はあ」

「迷惑かけたケジメとして、おまえの友達になってやる！ 男だからな！」

「あ、はい。ありがとうございます！」

満面の笑顔を浮かべるメイ。

「おい、もう次の人走ってもいいかー？」

向こうで体育教師が手を振っていることに、誰も気づいてはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5887y/>

黒色トワイライト

2011年11月21日14時49分発行